

第10章 リプレイ小説

『Myth & Renaissance』らしい宗教と科学が相いれない様子を描いたシナリオをリプレイ小説風に書き起こしました。

登場人物

ミシェル

アーニューウェル（水の女神）の女司祭。代々優秀なアーニューウェルの司祭を輩出するプレシス家出身であり、伯母は現在アーニューウェルの枢機卿。穏やかで慎重な性格。趣味は読書。将来の夢は人々がよりよい生活を送るための著作を世に残すこと。

ダンバイザー

メガス（光の神々の主神・運命の神）の聖騎士。戦災孤児であり、物心つく前からメガス神殿で育てられ、主神メガスと光の神々を崇める全ての人々は皆兄弟であるという崇高な理念を持つ。曲がったことは大嫌い。将来の夢は神の千年王国を地上に実現すること。

デミストス

聖都に住む名医。農村出身で、かつて母と妹を疫病で失い、癒しの道を志してアーニューウェルの神殿に入信するも奇跡の才能がなく、失意の内に下野。後に市井の薬師に師事し、再び襲った疫病をみごと食い止めて名を上げた。一見物静かだが実はプライドが高く、何よりも理不尽を嫌う。

プロローグ

聖都。

名前を忘れられ、ただ「聖都」とのみ呼ばれる宗教国家オーランの都。

満月湖のほとりに位置し、町中を水路が縦横に走る美しい水の町である。その水路の交わる地点に白く神々しい姿でそびえているのが、オーラン最高の権力者である教皇が住まう大聖堂であった。大聖堂のすぐ近くには、運命と秩序の神、メガスの神殿が建っていた。

オーランでは十五の光の神々と、その下位神である薄明かりの神々が信仰されている。メガスはその光の神々の主神である。

この日、メガスの神殿に集められた者たちがいた。

長い黒髪を垂らした二十歳ほどの女司祭が、メガスの司祭に案内されて神殿の廊下を歩いていた。この若い女司祭の首には水のしずくをかたどったペンダントが掛かっていた。水の女神、アーニューウェルの聖印である。アーニューウェルは知性と癒しも司っている。

道案内のメガスの司祭が待合室の扉を開けると、そこには十数名の聖職者たちが集まっていた。中には数人、見知った顔もある。

「おお、ミシェル殿。そなたも呼ばれたのか」

早速彼女に声をかけてきたのは、がっしりした長身の二十代後半くらいの男であった。首からはメガスの聖印を下げている。

「これはこれは、聖戦士ダンバイザー殿。あなたもおいででしたか」

女司祭は品よくお辞儀をした。

「今日は一体何の招集なのでしょうね。ここに集められている司祭や聖戦士の方々は、いずれも名の通った方ばかり」

「私もまだ詳しいことは聞いておらんのですが、やはりあの件でしょう」

「やはり、五日前の件ですか」

ダンバイザーは頷いた。あたりでも皆しきりに「五日前」のことについて噂している。

その時、ガチャリと奥の扉が開いた。ミシェルとダンバイザーが振り返ると、部下を従えたメガスの枢機卿が大股で歩いてくるのが見えた。彼こそが、メガス神殿の最高権力者である。

「ニコラウス様」

一同は一斉に礼をした。それを手で制しながら、メガスの枢機卿ニコラウスは一同の前に立った。

「皆、よく来てくれた。ここに集まってもらったのは他でもない。五日前に起こった事件について、諸君等に調査してもらいたいのだ」

ミシェルとダンバイザーは、やはり、という様子で

顔を見合わせた。

一度ぐるりと一同を見回した後、ニコラウスは話を続けた。

「皆も噂には聞いているだろうが、五日前、ミンタスの町で正体不明の大災害が起こったようなのだ。町から一人の少年と司祭がやって来て、事件の概要を我らに報告した。彼らの話によると、白い衣を着た男が現れ、大きな鉄の樽のようなものに火をつけたところ、町の半分があっという間に燃やし尽くされ、轟音とともに非常に強い突風が吹いて多くの建物が破壊されたという。五日前にこの聖都から見えた黒雲も、その事件と関係している可能性がある」

「なんと恐ろしい」

その場にいた聖職者たちが、互いに顔を見合わせた。

「町の半分が吹き飛ばす、などという話は聞いたことがありませんね。神話で町が滅んだという話はありませんが。ダンバイザー殿は何かご存じですか？」

「いや、ミシェル殿」

ダンバイザーは首を振った。

「そうですか」

ニコラウスは話を続けた。

「邪神、もしくは魔(ま)神(しん)の信者が関係している可能性があるが、釈然としない。そこで諸君ら精鋭に調査を頼みたいのだ。何か質問があれば答えよう」

邪神は闇の神々とも呼ばれ、神話によればかつて光の神々と闘った邪悪な神のことを指す。また、魔神の信者とは神々の存在を否定している者たちをさす。

「猊下、ミンタスの町の人々はどうなったのですか」

ダンバイザーがたずねた。

「分からない。彼らの現状も諸君に調査してもらいたい」

別の聖戦士がたずねた。

「他の町にも被害は出ているのですか？」

「詳しいことは分からない。無事な者もいるようだが」

また別の司祭が言った。

「猊下、そのミンタスからやって来た少年と司祭に、

さらに詳しい話を聞きたいのですが」

ニコラウスはため息をついた。

「ミンタスからやって来た二人は、我らにこの禍のことを伝えた後、残念ながら神に召された」

「なんと……」

「神のお導きのあらんことを」

一同は二人の犠牲者に追悼の祈りを捧げた。最後に枢機卿は、

「彼らの言葉を頼りに、我らは正しき行いを為そう」

という言葉で結んだ。

第一章 癒し手デミストス

ミシェルとダンバイザーは、聖都の住宅街を歩いていた。白い壁の家々が並んだ路地を曲がる。

「このあたり、のほほですわね」

住所の書かれた紙片を見て、ミシェルが言う。

「うむ、そこではないか」

ダンバイザーは一軒の家を指さした。窓や玄関にはいくつも植木鉢が並んでいた。

「ごめんください。癒し手デミストス殿のお宅でしょうか」

ミシェルが扉を叩くと、ほどなく中から人が現れた。豊かな髭を生やした白髪混じりの痩身の男であった。男は穏やかな笑みを浮かべてミシェルとダンバイザーを見た。神殿に仕える司祭と聖戦士であることが一目で見て取れた。

「これはこれは、神殿の方ですね。ようこそこのようなあばら屋まで」

「あなたがデミストス殿ですか？ 私たちはメガス神殿からミンタスの町の件で派遣されてきた者です」

「はい、わたくしがデミストスです。ミンタスの話はすでに神殿の方からうかがっております。どうぞ中へ」

デミストスは二人を家の中へ招き入れた。

デミストスは、神の奇跡は使えないが腕利きと評

判の町医者であった。オーランには神の奇跡と呼ばれる力が存在し、人々の病を癒すこともできた。しかし神の奇跡は貴重なものであり、市井の隅々までゆきわたるものではない。そこで発達したのが薬草学であり、それを駆使する医者も存在した。

先刻ミンタスの件でメガス神殿に集められた司祭たちは三人ずつの組に分けられ、具体的な任務を与えられていた。おおむねは、重要人物とおぼしき白衣の男を捜す組と、現地を調査する組に分けられたようだった。ミシエルとダンバイザーは、この町医者デミストスを迎えに行ってから現地へ調査に赴くようにニコラウスから命じられたのだった。

「申し遅れました。わたくし、偉大なるメガス神の神官戦士ダンバイザーと申します」

「アーニューエルの司祭のミシエルと申します。デミストス殿、あなたの癒し手としてのお噂はかねがねうかがっております」

二人は軽く頭を下げた。

「これはこれをご丁寧に。わたくしはしがない町医者者のデミストスです。何もありませんが、粗茶でも」

「お気遣いなく、デミストス殿。あまりゆっくりしているわけにもゆかないでしょう。あなたもミンタスのことは神殿の方から聞いていらっしゃると思います。今も生存者がいるかもしれない、ということですし、家もずいぶん倒壊しているようですから、一刻も早く現地へ行って手助けをした方がよいと思うのです」

ミシエルは知性と癒しを司るアーニューエルの司祭らしい落ち着いた口調でそう言った。デミストスは頷いた。

「なるほど。私としてもできるだけ多くの人を助けたい。それに神殿が私をお呼びとあらば、もちろん力をお貸します」

「すぐに出発ということでよろしいですか、ダンバイザー殿」

ミシエルはダンバイザーの方を見た。

「ええ」

ダンバイザーにも異存はないようだった。

「それでは荷物をまとめます。少々お待ちください」

デミストスは立ち上がり、二人が見ている前で支度を始めた。二人はデミストスが見たこともない道具を

いくつも取り出すのをじっと見つめている。

「それは何ですか？」

好奇心に耐えかねてミシエルがたずねた。

「これですか？これは虫歯の患者の歯を抜いた後に、止血をする道具です。虫歯の進行を抑えるには抜くしかございませんので」

「抜かないわけにはゆかないのですか？神の奇跡なら抜かずに直せますのに」

ダンバイザーはそんなことを言うのか、という目でミシエルを見たが、若いミシエルは引かなかった。デミストスはやや陰気な口調で、

「さようですか。神の奇跡が市井の隅々まで行き届けばそれもよろしいのでございませうが」

と呟いた。ミシエルは悪びれた風もなく頷いた。

「確かに、市井の隅々まで、というわけにはいきませんね。それゆえにあなたのような方がこの世界には必要なのでしょう」

「所詮私は隙間を埋めるための存在ですよ」

「そ、そのように卑屈になられずとも……」

ミシエルはきまり悪げに言った。

「しかし、薬草を用いて病を治すという話は聞くが、歯を抜くなどという話はこれまで聞いたことがない」

邪神か魔神のわざのようだといぶかしみながら、ダンバイザーは言った。

「虫歯の進行を食い止めるには、今は歯を抜くより他に手だてはございません」



「手だてがないということは、それは神が定められた運命ということではないのですか」

「さようですか。そのようなこともございますね」

デミストスはまだ思うところがあるものの、わざと話を切ったようであった。ダンバイザーも場の空気が陰悪なものになるのを避けるため、あえてそれ以上追及しなかった。しかしダンバイザーの心には釈然としないものが残った。

デミストスの支度が終わると、一同は他の調査員たちと共に馬車に乗った。目指すは災いの町、ミンタスである。

ミンタスから謎の黒雲が立ちのぼった日から、すでに九日がたっていた。

ミンタスの隣町にたどりついた一行は、ひとまず馬車を降りた。すでに日は西に傾き、大地に映る影も長くなっていた。

「今日はここで一泊ですね」

デミストスが言った。

「ですな。とりあえず情報収集をしましょう。私は町の中心のメガス神殿に行って話を聞いてこようと思いますが、お二方はどうされますか」

ダンバイザーはミシェルとデミストスを見た。

「では、私はこの町にあるもう一つの神殿に行きます。確かルカの神殿でしたね」

ミシェルが言った。ルカはメガスの妻とされる幸運の女神である。

「ではわたくしは薬草園に行って参ります。話によれば、そこに事件の患者たちがいるということですので」

デミストスが言った。

「ではまた、後ほど」

そうして三人は分かれた。

とにかく早く患者を診たいデミストスは、薬草園へ急いだ。

教えられた少し大きめの薬草園を訪れると、建物の床に患者たちが雑魚寝をしていた。その間を一人の薬草師らしき男が忙しそうに飛び回っている。これは大変だ、とデミストスは思った。

「ちょっと、よろしいですか」

「今忙しくて手が離せないのですが、どういったご用ですか」

薬草師はせわしない様子でたずねた。

「私は聖都から応援でやって来ましたのです」

それを聞いて、薬草師はようやくデミストスをきちんと見た。

「そうでしたか。これは失礼しました」

「ここにいるのはミンタスから逃げてきた者たちですね」

「そうです」

「とりあえず患者を診せていただけますかな？」

薬草師はデミストスの様子を観察し、どうやら本当に医者らしいと判断したらしく、彼に道を譲った。

「ではちょっと見ていただけますか。私にはよく分からないところがございますので」

デミストスは一通りあたりの様子を見て、最も具合の悪そうな患者の前に移動した。そしておおまかに観察をした。

「外的異常は…やけど、ですな。」

火事という話は聞いていたが、体の一方向だけがやけどになっていた。

「意識もないようですな。この者は、やけどによって苦しんでいるのですか？」

デミストスは先ほどの薬草師にたずねた。

「この町に運ばれてきた時にはひどいやけどを負っていたのですが、今は何と表現したらいいのか…わたくしもよく分からないのですが、やけどの治りが遅いのです。体が弱っている、と表現すればよいのでしょうか」

「それでは病気のようなものなのですね？」

「それが私にもよく分からないのです。それから彼の便に血が混じるようになりました」

「血便や体の衰弱に対する処方を行いましたか？」

「わたくしも薬草学の心得はあるので処方を行ったのですが、腕が未熟だったのか彼には効かなかった

のです」

「なるほど」

デミストスは髭に手をやって考えた。

彼の知りうる限り、このようなやけどが治らず血便が出るという病はない。もし病だとすれば、今までに知られていない病である。

(やけどは外的な原因によるものだが、命に関わるほどのものではない。それなのに患者の脈が弱いのはどうしたことか)

「他の者たちの症状はどのようなのですか？」

デミストスはさらにたずねた。

「同じような症状の者が何人かいます。中にはやけどを負っていないのに彼と同じような症状の者もいます」

デミストスの目がきらりと光った。

「ほう」

「これは病気なのでしょうか」

薬草師がたずねた。

「まだ、何とも。そうですね、この病気で命を落とした者はいますか」

「はい。その者はすでに大地に帰っております」

「そうですか」

デミストスはさらに薬草師や比較的元気な患者と言葉を交わしたが、やはりあまり詳しいことは分らなかった。

しばらくするとミシェルとダンバイザーがやって来たので、三人は一旦外に出て情報交換をすることにした。

「まずは私からご報告しましょう」

と、ダンバイザーが言った。

第二章 闇の神々の影

ダンバイザーがメガス神殿に行くと、年の頃は三十後半くらいの、細面の司祭が扉を開けて出てきた。彼はダンバイザーの出で立ちを見ると、

「あ、これは聖都からいらっしゃったんですか、どうぞどうぞ」

と招き入れた。

「メガス神の忠実な守り手、ダンバイザーと申します」

「これはこれは。お噂はかねがね伺っております」

「聖都からニコラウス枢機卿殿の命でやって参りました、うんぬん」

というわけで、ダンバイザーはこの町のメガスの司祭から話を聞き出した。

「ではダンバイザー様、私が目撃したことや、町の人のお話を合わせてお話ししましょう。九日前、となりのミンタスの町から黒いきのご雲が上がってくるという事件がありました」

「それは我々も見ました。一体何が起きたのかと」

「私たちもそれがよく分からないのです。その後その黒い雲が何やら黒い雨をもたらしたと聞いております。普通雨というものはダンバイザー様もご存じの通り透明なものですよね。アーニューエルが司る神聖な水が空より落ちてくるという神の恵みの一つなのですが、その雨がどういうわけか墨を塗ったように黒く、この町にも降りそそいできました」

「この町にもですか」

「はい。みなも気味悪がって家から出なかつたりしていましたが、中にはその雨を飲んだ者もいるかもしれません」

「その黒い雨を飲んだ者が急に体調を崩したということは？」

「今のところありません」

「ミンタスから逃げてきた者があったと聞きましたか」

「大勢の者がこちらの町に避難をしてくまして、この神殿の奥にもいますし、ルカの神殿にもいます」

「なぜ彼らはミンタスを離れる必要があったのですか」

「彼らが言うには、町のほとんどの部分が破壊されており、食べる物もないという状況なのだそうです」

「この町の食料がそのせいで不足したりというこ

とは？」

「そういうことは今のところはないですね」

「難民はけがをしたり病気になったりしていますか」

「わたくしは専門ではないのでよく分かりません。けががもともと体の具合が悪いのか、病なのかは分かりません」

「まあ、住み慣れた町から叩き出されたようなものですから、精神的なものもあるのでしょうか」

「以上が私の聞いてきた情報です」

と、ダンバイザーは結んだ。

「なるほど、私がルカの神殿で聞いてきたことと全く同じですね。ダンバイザー殿の方が詳しいくらいです」

と、ミシェルが言った。

「メガス神殿の司祭様がおっしゃっていたように、きれいな水は水の女神(アーニューエルの恵みですが、汚れた水や毒水など、闇の神々によって汚されて悪影響をおよぼすこともあります」

「黒い雨を飲んで血を吐いたとか、急に頭がおかしくなって刀を抜いて斬りかかってきたという話は、特に聞いたことはありません」

と、ダンバイザーが言った。

「私が患者を診たところでは、まだよくわかりません」

デミストスが言った。

「やけどではないのですか？」

「町が焼けたというのだから大きな火事のようなものではないのか」

ミシェルとダンバイザーがたずねた。

「やけどで命を落としたものもおるようですが、気になるのはやけどを負わなかった者も命を落としていることです」

「煙にまかれたということもあるでしょう」

と、ダンバイザーが言った。

「これまでの情報から考えてみたのですが、今回の件は憎悪の神プール、怒りの女神オグリソミア、疫病の神ボネロスといった闇の神々の影響が考えられます。プールの象徴は嵐ですから、黒い雲や突風と関係があるかも知れません。オグリソミアの象徴は火山です。火山灰も雲となって立ちのぼり、灰を降らせますから今回の場合とよく似ています。ただ、火山の噴火による熱と火山灰で町が滅んだというような事件は、神話にはあってもここ数百年の間には起こっていません。雷が落ちて町が滅んだという話も同様です。疫病で人が死に絶えたことはありますが、建物がこわれたことはありません」

ミシェルは長々と神学の知識を披露した後、結局分からないと言って首を振った。

「ミシェルさまのお力でこの者たちを救うことはできないのでしょうか」

アーニューエルの司祭は「癒しの水」という奇跡で人の傷を癒すことができる。それを知っているデミストスは、ミシェルにたずねた。

ミシェルは一瞬戸惑った。

確かに彼女は奇跡を使うことができる。しかし奇跡の力は万能でも無尽蔵でもなく、神の試練を乗り越えて少しずつ使えるようになるものであった。今回ここで「癒しの水」の奇跡を使えば、おそらく自分その奇跡は使えない。ミンタス入りを控えた今、「癒しの水」を使うことを、ミシェルは望まなかった。

「申し訳ありませんが、今はできません」

「そうですか」

デミストスはそう言ったが、顔を背けた後、目に冷ややかな光を灯したのをミシェルは見てしまった。己の力のなさを改めて感じ、胸に痛みを覚えた。

一方ダンバイザーは、患者たちの病は彼らに与えられた運命だと思っており、そちらには興味がない。それよりも町で起こったことに興味があるので、ミシェルとデミストスを誘って比較的体調のいい患者に話を聞きに行った。

「あなたのご存じの範囲で、ミンタスの町で何があったのか教えていただきたい」

「私でわかることでしたら」

と、その男は言った。

「地響きとともに火が建物などを呑み込みながら向かってきました。私は物陰に隠れたので、他の患者さんのようにひどいやけどをおわずにすみしました。私はやけどが軽かったのですが、家族の付き添いでここにいます」

「なぜ石煉瓦づくりの家が壊れたのか」

ダンバイザーがたずねる。

「突風というか、衝撃のようなものが襲ってきたようです。私にもよく分かりません。すぐに恐くなって逃げ出したので、他の者の話では、町の真ん中は壊れたらしいです」

「町の中心で何があったのでしょうか。あなたはご存じありませんか」

今度はミシエルがたずねた。

「めっそもございませぬ。とてもあの状況で町の中心に行こうなどとは」

「不審な人物を事件の前に見かけませんでしたか？」

「いいえ、存じ上げませぬ」

すると、近くにいた別の患者が、

「なんか白い服を着た変な奴を町の中心で見かけたと言ってるやつがいた」

と口をはさんだ。

(白い服…闇の神々の一人、破壊の女神アトゥクシア信者が時々全身に白い装束をまとうて儀式を行うけれど…。彼らにとって白は死を意味する色。それから、確か魔神を信仰する者の中には白い装束を着る者がいると聞いたことがあるわ)

ミシエルは思案にくれる。

デミストスは、科学者の中には白衣と呼ばれる衣装を着る者がいることを知っていた。それは破壊の女神(アトゥクシア)の信者のように死を意味するのではなく、単純に衣服が汚れているかを判断するためであった。しかし科学者は一般的に「魔神の信者」と呼ばれており、異端と目されていることを知っているデミストスは、ひとまず黙っておくことにした。

「アトゥクシアの信者か、魔神の信者がからんでいるのでしょうか」

と、ミシエルが言った。

「しかしミシエル殿、先ほどは憎悪の神(ブルー)がどうか怒りの女神(オグリソミア)がどうか言っていたではありませんか」

と、ダンバイザーが言う。

「いえいえ、先ほど申し上げたのは現象のこと。かつてそのようなことがあったというだけです。それに、神々が協力して何かを起こすということもありますし」

「つまり複数の闇の神々が関係している非常に大がかりな事態だということなのか！」

ダンバイザーは思わず大声で言った。

「想像の域を出ませんが…」

「いずれにせよ、邪神か魔神の信徒がからんでいると考えて間違いなからう」

「そうですね。起こっていることがこれだけ悲惨なのですから」

「あるいはフーの炎か」

と、ダンバイザーが言った。

フーは水の女神アーニュエルの兄とされる炎の神である。熱意や根気も司る。

「フーの炎である場合は、事態はさらに深刻です。確かに神話時代にフーの炎によって焼かれた町はありますが、それはいずれも闇の神々の勢力下にあります。つまり、今回の炎がフーのものであった場合は、ミンタスが邪神の信者の巣窟であるということになります」

「ふむ」

ダンバイザーは腕組みをしてうなづいた。

三人がさらに患者たちから話を聞くと、ミンタスには頑固な老人と動けない重病人しかおらず、多くの人は逃げてしまったことや、目撃者は証言を残し、ほとんど例の原因不明の病で死んでしまったことが分かった。さらに、町の中心部で白い服を着た男が大きい鉄の樽のようなものに火をつけた、その樽から火がおしよせてきた、町の半分があつという間に燃やしつつくされたという情報も手に入った。その男は火をつける前に、「この世界の真の姿が」どうのというよく分からないことを口走っていたという。

「炎の神(ワー)の司祭はそのようなことはしないと思いますが」

と、ミシェルが言った。

「ぜんぜんわかりませんな」

ダンバイザーはお手上げだといった様子だ。

頭を抱える二人を尻目に、デミストスだけは科学者の中の過激な一派が、時々そういうことを言っていることを知っていた。

「これは噂話で聞いたことなのですが…」

と前置きし、デミストスは言った。

「世界の真の姿というものについて語る人間は、おそらく魔神の信者でしょう。神を否定する彼らの他に、そのようなことを考える人間はいません」

なるほど、とミシェルは頷いた。

「衣装も白かったということですし、魔神の信者の線が濃厚になってきましたね」

「しかしデミストス殿は魔神の信者について詳しいですねあ」

ダンバイザーはじろり、とデミストスを見た。最初に聖都で会った時から、この男にはあやしいところがあるように思えてならなかった。

デミストスは涼しい顔で答えた。

「私は全ての方向について耳目を広げております」

「ほほう、すべての、ですか」

「あなたは何かについて耳を閉ざすことがあるのですか？」

「正しきことをすればそれで十分なのではありませんか？誤りに耳を貸す必要など、ないと思いますが」

ダンバイザーの舌鋒は鋭いが、デミストスはひるまない。

「私がいつ、耳を貸したと申し上げましたかな」

「耳目を開かれておられる…いや、まあいいでしょう。今は問いますまい」

ミシェルの心配そうな目をちらりと見て、ダンバイザーは口をつぐんだ。

こうして、その日の夜は過ぎていった。

第三章 ミントス

翌日の昼過ぎに、一行はミントスに到着した。

デミストスが町のまわりの様子に注意を払うと、小動物の死体がいくつかあるのを発見した。

(外傷はないな。特に痩せ細って衰弱したようでもない。若い死体もある。解剖をしたい所だが)

「お二人とも気がつかれましたか？鳥や小動物たちの影が見えないことに」

デミストスは、動物たちの死因と今回の患者たちに共通性があるかどうかを調べたい、と言った。

「何をするのでですか？」

ミシェルがたずねた。普通、死体を調べるということはしない。まれに検死をすることがあっても、外傷を見る程度である。

「メティアの奇跡を使うのですか？」

メティアとは、光の神々の下位神である薄明かりの神々の一人で、薬を司る女神である。メティアの司祭が行う奇跡の中には、「神の診断」という病の原因を突き止めるものがあった。

ところが、デミストスの答えはミシェルの常識を越えていた。

「残念ながら私は神の奇跡が使えません」

「で、ではどうやって？メティアの奇跡を願うのであれば病の原因は分からないのではないのですか？」

「そうでしょうか。人は己の目によってしか信じることができないと思うのです」

「それは神を軽んじることになるではありませんか」

「私たちは私たちにできることをするべきだと、そう思うだけでございます。祈りだけで全てが分かるのであれば、私がここに派遣される意味がありません」

「まあ…技術の神アーティスも仰っているように、技術もまた、人に与えられた恩恵の一つではありますが」

「そうです。ですから我々は日々腕を磨かねばならないのです」

「でも、私はこれまでにメティアの奇跡を願わずに病の原因を調べるということをしたことがないのです」

「いや、その前にメティア神の神寵を得られないというのが…」

ダンバイザーが思わず口をはさんだ。デミストスはダンバイザーの挑戦を受けて立つように言った。

「さようですか。私は不徳者でございまして、幼少のころより医師を目指してまいりましたが、この三十八年間、私は神の啓示を受けることがありませんでした。私は学ぶことによってさまざまな病を見つけました。奇跡によってではなく、経験によって見つけてきたのです」

「でもあなたはこれまでに病を発見し、それを治してこられたのですよね？ それこそがメティアの加護ではないのですか？」

「私は古くから培われてきた知識を師よりいただきましたので、それで判断してきました」

ダンバイザーはこの男は信用に足るのか、という目でデミストスをじっと見ている。初めは解剖するつもりだったデミストスも、下手をすると魔神の信者としてダンバイザーに斬られるのではないかと不安になり、あたりを注意深く見渡してみた。すると近くに先ほどのタヌキのふんらしきものが見つかった。血液が混じっている。

(これでつじつまが合わせられる)

デミストスはほっとした。

「ご覧ください。被害者と同じように血液の混じったふんが見つかりました。これはおそらく腹に異常がある証拠です」

「大火災と同時に病が蔓延したということですか？」

ダンバイザーが言った。

「その可能性は否定できません」

「病の神(ポネロス)も関係しておる、ということですか？」

「疫病が蔓延しているということは、我々も疫病の

まっただ中にあることになるかもしれません」

と、デミストスが忠告した。

「それはもとより覚悟の上ですよ」

と、ミシェルが微笑んだ。

「これも運命の神(メガス)が与えたもうたさだめにございますゆえ」

ダンバイザーも微塵もゆるがぬ様子で言った。

「わかりました。全ては神に委ねましょう」

デミストスも、もとよりここで引くつもりなどなかった。

一行は、さらに町の方へ移動した。司祭や聖戦士が来たを知ると、町の人々が集まってきた。

「助けに来てくださったのですか」

「我々は、聖都のメガス神殿からこの地の調査に使わされてきた者だ」

ダンバイザーは、あえて「助けに来た」とは言わなかった。

「他に怪我をしている方や病気になっている方はおられますか？」

ミシェルがたずねる。

「ええ、町の中にたくさん」

「では案内してください」

「はい。こちらです」

町はがらんとしてあまり人が住んでいなかったが、はじめははまだふつうに建物が建っていた。そのうち石造りの建物が地震で壊れたようになっているのが見えるようになった。焦げ臭い匂いや腐臭も感じられる。案内されて建物の中に入ると、この前の葉草園と同じように人が床に寝かされていた。やはりやけどを負っている。ミシェルは今回の事件を直接目撃した者を捜したが、

「直接見た奴はもうみんな死にしまったなあ」

という返事が返ってきただけであった。それでも情報をつめると、町の中心というのにぎやかな市場であり、実際に行くと白衣の男が火をつけた樽の残骸があると言われた。デミストスを残し、ミシェルとダ

ンバイザーは町の中心へ調査に向かった。

町の中心付近では、崩れた家やがれきの下に埋まって手だけ出ている遺体が確認された。さらに中心へ向かうと、建物はほとんど何も残っておらず、唯一メガス神殿の壁だけが残っていた。あたりには人間かどうか見分けもつかないほどに黒こげになった遺体が転がっている。

証言通り、町の中心には樽の足のようなものがあった。ダンバイザーは注意深く観察した。

「鉄でできているようですね。上から下に壊れたのか。破裂して破片が遠くに飛ばされたかも知れない」

「例の樽とは、これでしょうか」

ミシェルが言った。

「ということではないですか。建物が壊れた位置がこちらがわですから」

二人は白装束の男の遺体を探したが、何も見つからなかった。樽付近には、黒こげの死体すらなかった。

「これは…想像を絶する災厄です」

ミシェルが悲痛な面持ちで言った。

「複数の邪神が関係しているとしても不思議はありません」

「邪神だけでなく魔神も絡んでいるかも知れません」

二人は鉄の樽の残骸を証拠として回収し、さらに黒い雨が降った後に沈殿したと思われる黒い物質を見つけて、それも証拠として回収した後、デミストスのもとへと戻った。

デミストスは、薬草園で頭を抱えていた。彼にはこれ以上手の施しようがなかった。

(果たしてこの病に奇跡の力は通用するのか)

デミストスが知りたいのは、今はその一点であった。そのため、ミシェルとダンバイザーが戻ってくると、デミストスは言った。

「ミシェル殿、お願いがございます」

「何でしょう」

「わたくしは自分の持てる力を全て費やしましたが、この病の正体を突き止めることができませんでした。己の無力を恥じるばかりですが、果たしてこの病

に奇跡の力が通用するのか、ミシェル殿に試していただきたいのです」

己の無力という言葉に、ミシェルはどきりとした。無力なのは自分も同じだった。

(それでも、一人でも病に苦しむ人を救うことができるのなら)

ミシェルは承知し、最も症状の重い患者の前に立て「癒しの水」の奇跡を神に祈った。

今にも死にそうだった患者は、アーニューエルに祝福された水を飲んだ途端に目を開き、体中の重度のやけどがみるみる消えていった。

一同は、特にデミストスは目を見張った。

(やはり、奇跡は奇跡なのだ…)

患者はミシエルの手を取って感謝した。

「感謝するなら私にではなく、神にしてください」

ミシエルは優しく微笑んでそう言った。

翌日、一同はミンタスを後にした。

集められるだけのものはすでに集め終わった。あまり長く病の神の領域にいることも望ましくはない。それに、白衣の男の調査に向かった他の調査員たちから話も聞きたかった。

かくして一行は、再び聖都へ戻ったのである。

旅の埃を払う間もなく、三人はメガス神殿へ向かった。そこで彼らは白衣の男を追った組の司祭に出会った。

「これは、アレフ殿」

ダンバイザーが声をかけると、アレフと呼ばれた司祭が振り返った。

「おお、ミンタスの調査に行かれた方々ですね。ご苦労様でした。いかがでしたか、あの町は」

「これから猊下にご報告申し上げます所ですが、ひどいものでしたよ」

「そうでしたか。我々の方も調査は順調に進みましてね、ミンタスの事件に関わったと思われる魔神教徒が一人、捕まったのですよ」

「ほう」

「今は牢に入れられています」

「それはよいことを聞いた。ではアレフ殿、急ぐのでこれにて失礼します」

三人はアレフと分かれ、枢機卿のもとへと報告に行った。

枢機卿ニコラウスは三人の報告を受けると、大きく頷いて言った。

「やはり、魔神の信者が絡んでいる可能性があったか。実は、ミンタスの事件が起こる直前に、聖都のあちこちにこのようなビラが貼られていたのだ」

ニコラウスは一枚の紙を示した。そこにはこう書かれていた。

「我々は現実という虚構の中に生きている。もはや神の時代は終わりを告げた。我々人間には科学という新たな力がある。今こそ、科学の力で、この世界を支配している神の虚構をたたき壊すべきだ」

最後にはノイエンという名が記されていた。

「当初はたちの悪い悪戯だと思われていたが、今となっては犯行の予告であったと考えた方がよいかもしれない」

「狛下、魔神の信者が牢に捉えられていると聞きました。その者は何と言っていたのですか？」

ミシェルがたずねた。

「ああ、あの者か。そなたたちが直接会って聞いてみるとよいだろう。しかる後、ミンタスの件とあわせて報告書を作って欲しい。明日にはこの事件について聖都の人々にどう伝えるかということを議論したい。そのおりにはずいぶん意見を出して欲しい」

「分かりました」

三人は礼をして枢機卿のもとを辞した。

向かうは地下牢。

魔神教徒、すなわち科学者との対面であった。

第四章 科学者ボイル

魔神教徒のボイルという男への尋問は、一人一人行うべきだ、というのがデミストスの主張であった。

往復十日間の旅を経て、デミストスのことを自分な

りに理解していたミシェルとダンバイザーは、彼が言わんとすることをおぼろげながら理解した。ダンバイザーが怒りのあまりボイルを斬ってしまうことを危惧し、尋問の順序はミシェル、デミストス、ダンバイザーの順に決められた。

ミシエルの尋問が終わり、デミストスの尋問も終わった。そこでダンバイザーは意気揚々と牢に乗り込んだ。ふと、ミシエルが物陰に隠れて自分の方を見ているのに気づいたが、彼は気にせず尋問を始めた。

「さて、魔神教徒よ。己の罪深き行いを偉大なる神の前で語り、悔い改める時が来た」

ボイルは、前の二人とは違ってうるさいのが来たという顔をしたが、冷笑を浮かべて

「話が聞きたいのなら聞かせてやろう」

と言った。

「貴様、何をした」

「ミンタスのことか？私はほんの手伝いをしただけで、詳しいことは知らなかった。町があんなことになるということも知らなかった」

「手伝い、ということは、貴様の他にも仲間がいたということだな」

「いた」

「何人だ」

「私はあまり中心部分に関わっていたわけではなからよく分からないが、仲間がいたのは確かだ。今どこにいるのかも知らない」

「知らぬですむと思っているのか」

ダンバイザーは剣の柄に手をやったが、ボイルは冷やかに笑った。

「本当に知らない。私を殺しても無駄だ」

「ふん。不遜な奴だ。まあよい。いつ頃から、どこで準備を進めていたのだ」

「以前から、科学の力を世に示そうという計画はあったが、今回の計画がいつから始まったのかは覚えていない。それに私は装置を運ぶ準備を手伝っただけで、それには一ヶ月もかかっていない」

「装置というのは何だ」

「今回の災いのもとになったものだ」

「あの鉄の樽か」

「そうだ」

「あれは何なのだ」

「説明しても構わないが、おそらくお前たちには理解できないだろう」

「ふん、汚らしい魔神の道具のことなど、知る必要もない。貴様等の首謀者は誰だ」

「ノイエンという男だが、今どこにいるのかは私も知らない」

「ミンタスの町には病の神(ポネロス)の力が働いた痕跡があった。貴様ら魔神教徒は、闇の神々の力も節操無く借りるのか？」

「我々が信じているのは科学だけだ。おまえたちが闇の神と呼ぶものは一切関係ない」

「おろかなことよ。神の御業を、それと知らずに弄ぶとは。神を否定しながら、邪神の力を借りるとは何という破廉恥。自らが犯した罪の意味すら理解できぬ者には、処刑する価値もない。神を冒涇したことの罪深さを、その身で学ぶがよい」

そう言い捨てると、ダンバイザーはミシェルの方を見て笑った。

「ミシェル殿は何を心配されているのか分からぬが、尋問はここまでにしておこう」

「あら、気づいていらしたのですね」

ミシェルは恥ずかしそうに笑って物陰から現れた。そしてダンバイザーとともに地下牢を後にした。

再び集まった三人は、明日の会議の内容について議論を始めた。

デミストスは、ミシェルとダンバイザーに提案した。

「市井にも今回のことは広まってしまったようですし、ここは思い切って全土に布告を出して魔神信者に改心を促し、再度の犯行を食い止めるべきではないでしょうか」

「それは再度の犯行を予定していなかった場合、無駄な混乱を招くだけではありませんか」

と、ミシェルが難色を示した。デミストスは答えて言った。

「彼らの中で改心をして出頭する者が出るかも知れません」

「改心とは具体的には何をさせるのですか」

今度はダンバイザーがたずねた。

「行いに対する改心を促すのです」

デミストスが答えた。

「改宗ではない、と。彼らは今回のミンタスの件だけではなく、神を信じないという点だけでも悪なのですよ」

「それについても彼らが改心し、出頭しない限りは詮議しても由なきこと」

「庶民に魔神に対する畏怖の心を抱かせてしまうのはあまりよろしくないではありませんか？」

「それではこれを伏せておきますか？我々が何か情報を隠しているとすれば民は……」

デミストスの言葉をダンバイザーは遮る。

「いずれにしろ神殿が調査を行った上は、何らかの形で結果を公表せねばなりません」

「魔神教徒のしわざとして彼らを糾弾するべきではありませんか」

デミストスも負けじと続ける。

「私は邪神信者のしわざであると言うべきだと思います。今回のことを魔神教徒の起こしたことでなく、邪神教徒によるものだということにして彼らのプライドを刺激する」

「そして再度の犯行に及ぶことになれば、いかにいたします」

「私もそれを危惧しています」

ミシェルが口をはさんだ。

「そのために全土で警戒をしているのでしょうか？彼らが焦って行動に出たところを一網打尽にする」

ダンバイザーの口調には自信がみなぎっていた。

「一網打尽にできれば、の話です」

デミストスの目がきらりと光った。ダンバイザーは憤然として言い返す。

「できれば、ではなくてするのです。せねばならないのです。それとも奴らのような危うい存在を野放しにせよと？ 奴らの改心などというものに期待して、放置すると仰るのですか？」

「いえ、放置はしません。しかしあえて彼らを刺激することはありますまい」

「警備を嚴重にするとともに、彼らの結束を弛めることで、彼らの力を弱めるべきです」

「結束を弛めるのならば、被害の実態を知らしめることで良心のある者の改心は促せましょう。近い者ほど、一派の者の犯行であると勘づいているでしょうから」

「奴らに対するメッセージと、一般庶民に対するメッセージは分けて考えねばならない。魔神の力を神殿が認めるような発言は、極めて危険が大きいのと思います」

「魔神の信者が犯行を行ったと発表することだけで、我々が彼らの理論を認めたことにはなりませんまい」

デミストスが反論する。しかしダンバイザーは引かない。

「力を認めたことになります。しかし邪神の力が人の力では太刀打ちできないものであることは、神殿の教えでも否定されているものではありません。だからこそ我々は神の恩寵にすぎなのです」

「しかしここ数百年の間に、それほど大きな邪神による災害は起こっておりません。人々の不安を煽ることになります」

「不安になった人々はどうします。より一層光の神々への信仰を深めることになるでしょう」

ダンバイザーが止まらなくなるのを危惧したミシエルが、再び口をはさんだ。

「では、それぞれに報告書を作成し、明日提出することにしましょう」

「それがよいでしょうね」

デミストスとダンバイザーも同意した。

翌日、三人はそれぞれの報告書を提出した。報告

書は会議の席で回し読みされた。

ミシエルの見解は、今回の事件には憎悪の神(プール)と怒りの女神(オグリソミア)と病の神(ボネロス)の力が働いていると考えられ、魔神の信者がそれら邪神の力を利用した、あるいは魔神の信者の行いが邪神の力を呼び込んだという事実を民衆に言うべきだというものであった。

「魔神が邪神を使役するというと邪神が劣等な存在であるというような印象を与えないか？」

と、ダンバイザーは言った。彼の報告書は、魔神の信奉者による犯行であると思われるが、魔神の力がこのように強大であると言うことは人々の生活に悪影響を及ぼすので、決して言うべきではない。ゆえに邪神教徒犯行説を支持する、というものであった。

デミストスは事実だけを書き、自分の見解は一切交えなかった。黒い水、小動物、病の状況。離れたところでも同じ症状の病が見られたこと。患者は薬草学の通常の処方によっては直せなかったが、奇跡によって直すことができたこと。そして魔神教徒のボイルの証言を詳細に記述した。どのような経緯でその話になったのかは書かなかったが、今回の事件は示威目的であり、破壊活動が目的だということをボイルは知らなかったこと、今回の火災によって誘引された疫病が彼らの事前に認識する範囲ではなかったということ、を書くと同時に、彼らが今回の装置を作るに至った、彼らが主張する論拠と製作方法も書かれていた。なぜこれが発火するのか、なぜこのような大きな力がはたらくのかという科学的な仕組みを、デミストスの理解する範囲で書いてあった。今後の対策についての見解は一言も書かなかった。

デミストスがボイルから何を聞いたのか気になっていたミシエルは、彼の報告書を読んで驚いた。爆発のプロセスについては、何を言っているのか全く理解できなかった。

メガスの枢機卿ニコラウスが言った。

「報告書の件だが、今回の事件の犯人は、やはり魔神の信仰者である可能性が高いと？」

「きわめて高いと思います」

ダンバイザーが自信に満ちた様子で答えた。

「この者がじつは邪神の信者であるという可能性は分からない、ということでもいいのかな」

「まだ首謀者を捕らえたわけではありませんし、可能性は否定できないと思います」

ミシェルが答えた。

「これだけ狂った殺戮行為を行っていて邪神に心を囚われていないというのは私にとっては不思議だが、そなたたちの言うとおりのかもしれないな」

と、ニコラウスは言った。

「魔神に心を囚われた者も邪神に心を囚われた者と同じく、狂気です」

「ダンバイザーの言うとおり、それは一つの狂気の形かも知れない。なるほど、ミンタスの被害状況については、書かれている通り、と。では、最後の尋問の件だが、これは、このようなことをあの男が言っていたのか」

と、ニコラウスはデミストスに聞いた。

「はい、彼が供述したままに。私が理解できたことまでを書いてあります」

「これは一体どういうことなのか分からないのだが、これは彼ら魔神が信仰する彼らの神話なのか？」

「彼らが装置と呼ぶものが発火するプロセスを彼らなりに説明したものです」

「ふむ、なるほど」

「それが神話であるのかは、わたくしには判断のつきかねることです」

ニコラウスは眉をひそめて悩んでいる。

「これを、魔神の神話ではなく、我々の分かるような言葉で言うとうどうなるのだ？例えば、炎の神(フー)の力は一体どこに働いているのかといったように」

答えに窮したデミストスに代わり、ミシェルが答えた。

「私の解釈では、憎悪の神(ブール)と怒りの女神(オグリソミア)と病の神(ポネロス)の力をこの鉄の樽の中に封印してあったのではないかと」

「なるほど、そういうことができるのか」

「私は神学には詳しくありませんが、このような物質とこのような物質を組み合わせるとこのようなものができるのではないのでしょうか」

デミストスは言い添えた。

「では、その三つの邪神の力をこの中に封印する何らかの奇跡が行われてこの樽ができ、それに魔神が火

をつけて今回の事故が起こった、と」

「私の見解を述べさせていただければ……彼らが邪神の力を意図的に封じたかどうかは分かりません。彼らは意図せず偶然に闇の神の力が封印された可能性が考えられます。従って、このプロセスの内、どの段階で邪神の力が封印されたのかは分からないと思います」

と、デミストスは言った。

「そうすると、これは偶然の産物であると考えた方がよいのか」

「ボイルの供述によれば、その可能性は否定できません」

「彼は知らなかったのかも知れませんが、首謀者は知っていたかも知れませんよ」

と、ミシェルが言った。

「彼らは同じ儀式をくり返すことで同じものを作ることができるのか」

ニコラウスはまた頭を悩ませている。

「彼らの主張によれば同じプロセスを踏むことで同じ結果が得られるということですよ」

と、デミストスが答えた。

「なるほど。これは厄介なことになってきたな。この度の件はどのように公表するべきか。

我らとしては、魔神のしわざとは言いたくない。邪神の力が解き放たれてこういう禍が起こったと言いたい、意見があるなら言って欲しい」

「過程はどうあれ最終的には邪神の力による禍をもたらしたことは事実であり、嘘ではないので教会の権威を失墜させることもならないでしょう」

と、ダンバイザーは言った。

「ひとこと付け加えるとすれば、それを布告することは結構なことだと思いますが、枢機卿陛下ならびに上層部の方々には、これを引き起こしたのは邪神教徒のしわざではないということを重ね承知しておいていただきたいと思います」

と、デミストスは言った。ミシェルに異存はなかった。そこまで決まると、会議は終了した。皆退席していったが、デミストスだけは個人的にニコラウスのもとを訪れた。ニコラウスは待っておったよという様子

で私室にデミストスを迎え入れた。そもそも、デミストスを調査の一員に加えるよう指令をだしたのはニコラウスであった。デミストスは恭しく礼をして言った。

「狒下にご報告申し上げておきたいことがひとつございます。今回魔神教徒の一味として捕まえられたボイルですが、彼は自らの行いを悔い、贖罪を希望する可能性があります。その際、彼の命を永らえて、彼の持てる知識および魔神教徒の人脈を把握することは、今後われわれが直面するであろう魔神の驚異に対抗するための有用な情報源になることと思えます。万死に値する罪を犯した者ではありますが、どうか罪一等を減じ、彼の命を、そして彼の知識を永らえさせることを強く希望いたします」

「魔神と邪神というものはやはり違うものなのか」

「私は神学について学ぶことはありませんでした。私は貧しき者のならいに従い、目の前で起こったことだけを見てまいりました。臨床の経験によって構築される法則があることは確かです。その際に我々賤民の医療には、神の祈りがなくとも治療が可能なのでございます。彼ら魔神教徒の行うことの中には、神の介しない因果関係を持つことが可能であると思われま

「そうすると、そこには神の存在はないと？」

「わかりません。しかし我々には、神の力がなくとも可能な処方が存在するという事です」

「なんと」

ニコラウスは驚いた。

「では今回の件も同じだということか」

「神の作られた法則を学ぶことのなかった、無学な私がこのように考えたことにすぎません」

「そなたはこれまで多くの命を救ってきたということだが、その上で今のような話をしているのだろう。今回と同じような事件が再び起こることはあるだろうか」

「あると思います」

「それに対抗するには、あの男の知恵が役に立つのかどうか知りたい」

「おそらくあの男の知恵はそれほど深いものではありませんが、それでも全ての方向に耳目を広げることが肝要かと思えます」

「確かに、偉大なる神メガスは、魔神をうて、とそ

の教えの中で説いたことはない。処分に関しては今の意見を参考に考えさせてもらおう」

「かの者の知識を利用して、今回起こった惨事の疫病を食い止めることができるかも知れません。残念ながら奇跡の力では、あれだけの被災者を救うことはできません」

そこまで言うと、デミストスは深くお辞儀をして去った。

次に彼が向かったのは地下牢であった。

彼はボイルから返答をもらわねばならなかった。

「枢機卿狒下はあなたに贖罪の意志があるかどうかに興味がおありだが」

「狒下の仰る贖罪とはどういう意味か。私は科学は捨てん。もし改宗せよというのであれば……」

「改宗であるか、それは私にも分からぬ。しかしあなたはあなたが持てる知識を大聖堂に与えるのであれば、おそらくそれが彼らのためになりましょう。私の考えによれば、あなたはあなたの信念に基づいて行動すればよいのです。おそらく大聖堂があなたを生かすとするばそのためではないかと思えます。あなたの知識がこのたびの災いを救うために役立つのであれば、それは人として為すべきことではないのでしょうか」

しばらく考えて、ボイルは言った。

「わかった。私が持てる真の世界を彼らに教えよう」

デミストスはボイルの答えをニコラウスに伝え、メガスの神殿を後にした。

ミシェルは、神殿から出てくるデミストスを待っていた。依頼された仕事が終わった以上、デミストスとの接点なくなる。次に会えるのがいつかも分からない。その前に言うておきたいことがあった。

「デミストス殿、これで私たちの仕事はもう終わったということになるのですね」

「ミシェル殿。そうですね、教会からいただいた仕事は終わりました。しかし私の仕事はまだ終わりません」

「どのような？」

「私は薬草師になると決めた時から、この世から疫病を根絶すると決めていました。そしてこの度、新たな疫病を見てしまった。私はあれを根絶せねばなりま

せん」

「苦しむ人々を救おうというその崇高な志は、暁の女神クリエの教えですね。本当にご立派です。その信念をいつまでも忘れないでください」

ミシェルは、デミストスが魔神の道に足を踏み入れていると危惧していた。彼がクリエの志を忘れぬように…それがミシェルの願いだった。

「ありがとうございます。いつかクリエが私に答えをくださることを祈っています」

「人も神の一部なのですよ。声を待つのではなく、あなたがいつか答えを見つけるのです」

ミシェルは真摯な様子でそう言った。少し意外そうな顔をした後、デミストスは微笑んで去っていった。やわらかな日差しが降りそそぐ中、ミシェルは彼の後ろ姿を見送った。

エピソード

その翌朝、教会の張り紙と新聞の一面を飾るように、この間のミンタスの事件が邪神のしわざであり、それにもなつて警備が厳しくなるという内容の記事が載せられた。町中に司祭が警備に出るので、あやしい者を見かけたら司祭に通報するように、とも書いてあった。

ダンバイザーとミシェルは再び上層部から命を受け、警備の任にあたつた。また、同じその日、牢からボイルの影が消えた。その行方は、一部の限られた者だけが知るところとなつた。その後、聖戦士ダンバイザーの巡回ルートに、デミストスの家加わつた。それからしばらく後に、デミストスもまた姿を消したという。